

京極読書新聞 <第27号>

発行日 平成23年 10月 1日(土)
京極町生涯学習センター湧学館

職場体験学習を終えて

京極中学校2年 熊谷 真純 (くまがい・ますみ)

私は、湧学館で職場体験をしました。職場体験の場所をなぜ湧学館にしたかと言うと、私は一度、湧学館の一日司書に参加をしようと申し込みました。しかし、あいにくその日は、家の用事があり、一日司書体験に参加する事が出来ませんでした。なので、中学校の授業で「職場体験に行く」と言われて、場所の一覧表を見ると、湧学館があったので、湧学館に行く事にしました。その他にも、前から、湧学館のカウンター業務や本をもとの場所に戻すと言う事もやりたかったので、湧学館に決めました。

実際に二日間、朝の9時30分から夜の6時15分ぐらいまで、湧学館のお仕事をやらせてもらいました。最初は、自分がやりたくてもやれなかった事がやれて、楽しいワクワク感でいっぱいでした。朝から、仕事をやると、とても面白く、本当に「ここを選んで、よかったー」と思いました。でも、色々な仕事をやるとなると、汗をかくなり、忙しくて楽しい気分と「大変」と言う気持ちの2つでいっぱいになりました。この瞬間、「ああー、やっぱり働くって、大変だなあー。」と思いました。

一番難しいと思った仕事は、壊れた本を修理する仕事です。はっきり言うとちゃんと出来るか、心配をして緊張をしたので本の修理が終わると、「はあー」とため息をついてしまいました。それだけ、大変な仕事でした。なので、湧学館の職員の皆さんと同じく「本は、大事に扱って欲しいなあー」と思いました。私も結構湧学館の本を読む事が多いので、これからも本を大事に扱いたいと思います。

次に難しいと思った仕事はカウンター業務です。本を借す、返却をしてもらうと言う仕事は、私も慌てず出来ました。DVDを見ると言う方には、少し時間が経ち、待たせてしまう事がありました。その時は、すごく慌てました。そして「情けないなあー」と思いました。

楽しいと思った仕事は、幼児室の窓に貼る折り紙の飾りを作ると言う仕事です。私は、もともと、折り紙を折るのが苦手でした。でも、苦手だからやらないと言うのでは「仕事」ではな

く、それでは通用しないと言う事は分かっていたので、折り紙を折りました。折り紙を折る時は、「今、たくさん折って、得意にしよう」と思いながら、折りました。すると、折り紙を折るのが楽しくなってきました。

この2日間は、とても充実した2日間だったと思います。そして、改めて「仕事は、大変」と言う事を感じました。「職場体験は、湧学館に行きたい」と希望していた多数の人達の中で来たと言う事を意識して職場体験をしようと思った最初から思っていました。その思いで十分職場体験が出来たと思います。

最後に、働くと言う事は、大変で簡単ではないと言う事が改めてよく分かりました。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

後志シネマ散歩

第5回 坂の上の雲 / 海は甦える

湧学館司書 新谷 保人 (あらや・やすひと)

今回のシネマ散歩は、テレビドラマを2本。ひとつは、これはもう誰もが知っている「坂の上の雲」。10月に入り、今年も「坂の上の雲」のシーズンが近づいてきましたね。今年、第3部。3年越しのドラマもいよいよ完結です。

「坂の上の雲」が話題になってくると、なぜか懐かしく思い出すドラマがあります。それが、「海は甦える」。作家・江藤淳が十年の歳月をかけて書きあげたドキュメント作品を、TBSテレビがドラマ化しました。昭和52年(1977年)8月の放送。日本初の三時間ドラマでした。制作費は1億円。(当時の「1億」です。今の「坂の上の雲」にも決して負けていません!) 視聴率、29.2%。その年のテレビ大賞優秀番組賞などを総なめにした名作です。

「海は甦える」は配役が凄い。主人公の日本海軍の父・山本権兵衛(←「ごんべえ」ではありません。「ごんのひょうえ」と読みます)に仲代達矢。妻・トキに吉永小百合。娘・イネに大竹しのぶ。広瀬武夫は加藤剛、伊藤博文は西村晃が演じるという豪華さ。「坂の上の雲」で一躍名をとどろかせた秋山真之役を、性格俳優の米倉斉加年がやっているというのも面白い。

どちらの作品も「日露戦争」が舞台です。明治の人間像を描くのに、司馬遼太郎は、正岡子規、秋山兄弟という、ある種思ってもみなかった切り込み方をみせれば、対する江藤淳は海軍大臣・山本権兵衛という、これ以上はないくらいのオーソドックスな攻め方をしているのも面白い。二人の大作家の持ち味のちがいが大変興味深い。

1977年は、まだビデオデッキがありません。家庭用ビデオが普及してくるのは1980年代の半ばです。「海は甦える」は、そのちょうど狭間の時期の作品なので、じつはビデオ化されていないのです。「坂の上の雲」の人気にあやかって、なんとかビデオ化されないものかといつも思います。

さて、今年も「後志文学散歩・バスの旅」の季節がやってきました。今年、京極町出身の作家・峯崎ひさみさんの小説「春蘭」の舞台となった小樽です。日露戦争に勝利した日本。明治39年(1904年)11月、日露国境画定会議が日本郵船小樽支店の二階会議室で行われ、南樺太が日本領土となりました。樺太への日本人移住が始まった歴史的な街を散歩します。昼食は、その国境画定会議の祝宴が張られた海陽亭(旧・魁陽亭)です。ドラマ「海は甦える」のロケで使われた装飾をそのままに残す「明石の間」ももちろん見学します。

峯崎ひさみさんは樺太・豊原生まれ。ほぼ最終に近い引き揚げ船で、この京極の町にたどりつきました。今回の「バスの旅」が、期せずして、樺太が始まり、樺太が終わるまでのバスの旅となってしまったことはとても感慨深いものがあります。運河やガラスではない小樽を案内できることをうれしく思います。



海陽亭



明治37年、日露国境画定会議祝宴が開かれた「明石の間」

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

